

秋香台文庫本むぐらの四つ仮名表記

森岡信幸

2008-01-11 広島大学国語史研究会

1 はじめに

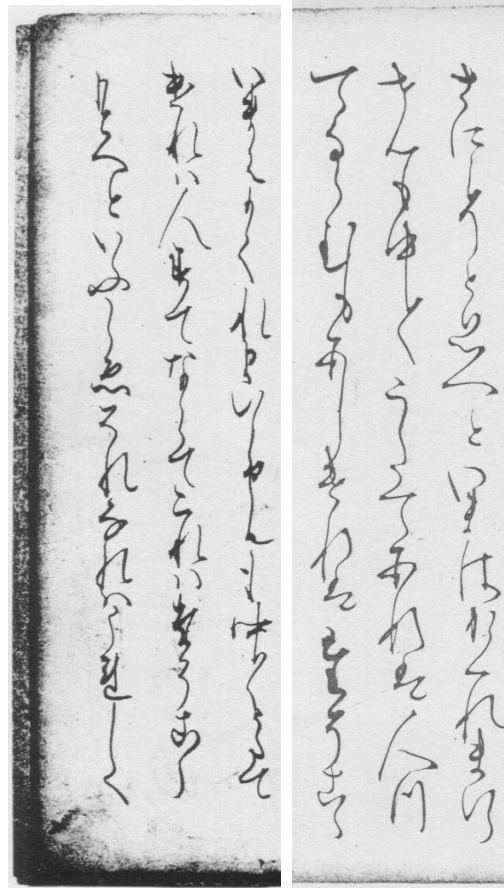
中世王朝物語、むぐらの自立語索引を作成するなかで、秋香台文庫本むぐらの本文にいわゆる四つ仮名の違例が存在することに気づいた。

- いまはかくれまいせんも、中／＼うたてければ、人ずてならで、「これはたそ。こゝもとへ」といふこゑ、それなれば、うれしくて、(五七オ9～11、画像左)

この箇所は、むぐらのもう一つの伝本である書陵部本の同文的箇所¹では、正しく「づ」を用いて記されている。

- いまはかくれまいせんも、中／＼うたてあれば、人つてならむもあしければ、「たそ。こゝもとへ」といふこゑ、それなれば、うれしくて、(一二ウ8～一三オ1、画像右)

両本はともに鎌倉期の写本とされている。しかしながら、一般に京都方言においていわゆる四つ仮名の合流した時期は室町末期とされており、「人ずて」という表記を重視するならば、また、こうした例がほかにも存在するようであれば、書写年代に再考の余地があるのではないか、と思われた。そこで本発表は、秋香台文庫本の四つ仮名表記の様態を調査、報告するものである。



¹両本の対応関係については、後掲の表1を参照。

2 調査

2.1 方法

むぐら自立語索引のデータの用例部分から、仮名「じ」「ぢ」「ず」「づ」が含まれるものを抽出、整理する。

2.2 結果

	例数
じ	178
ぢ	13
ず	111
づ	107
じ → ぢ	0
ぢ → じ	0
ず → づ	0
づ → ず	1

「じ」と書くべきところを「ぢ」と書くもの、その逆に「ぢ」と書くべきところを「じ」と書くもの、「ず」と書くべきところを「づ」と書くものは見られず、「づ」と書くべきところを「ず」と書くものも、「人ずて」以外の例は見られなかった。²

以下に、その全語例を掲げる。

2.2.1 じ (178 例)

語種	語	用例	所在
自立語/和語	いみじ	いみじく (中止法)	秋五ウ 3
		いみじき (連体法)	秋五オ 4
		いみじく (連用法)	秋六オ 4
		いみじく (連用法)	秋六オ 10
		いみじく (連用法)	秋六ウ 1
		いみじく (連用法)	秋一二オ 6
		いみじくこそ	秋一五オ 11
		いみじく (連用法)	秋一七オ 2
		いみじく (連用法)	秋一七オ 8
		いみじく (連用法)	秋一七オ 11
		いみじげなるも	秋一七ウ 11
		いみじく (連用法)	秋二四ウ 10
		いみじく (連用法)	秋二六ウ 10
		いみじく (連用法)	秋二七オ 4
		いみじく (連用法)	秋二七オ 4
		いみじげなるに	秋三一オ 3

²書陵部本の本文を採用した箇所については加えていないが、違例はない。

		いみじく (連用法)	秋三一ウ 9
		いみじく (連用法)	秋三二ウ 1
		いみじく (連用法)	秋三六ウ 10
		いみじく (連用法)	秋三七ウ 6
		いみじく (連用法)	秋三七ウ 10
		いみじく (連用法)	秋四一ウ 2
		いみじく (連用法)	秋四五オ 5
		いみじく (連用法)	秋四七ウ 5
		いみじき (連体法)	秋四七ウ 7
		いみじく (連用法)	秋四九オ 4
		いみじく (連用法)	秋四九オ 10
		いみじく (連用法)	秋四九ウ 5
		いみじく (連用法)	秋五二オ 10
		いみじく (連用法)	秋五八オ 4
おなじ		おなじ (連体法)	秋二〇オ 10
		をなじ (連体法)	秋三二オ 4
		をなじ (連体法)	秋三五オ 6
		をなじくは	秋五〇オ 4
		をなじくは	秋五〇ウ 9
かたじけなし		かたじけなく (連用法)	秋八オ 4
		かたじけな	秋八オ 6
		かたじけなき (「ぞ」の結び)	秋八ウ 4
		かたじけなく (連用法)	秋九ウ 1
		かたじけなげに (連用法)	秋一八オ 10
		かたじけなけれど	秋二一ウ 5
		かたじけなき (連体法)	秋二二オ 4
		かたじけなくも	秋二二オ 8
		かたじけなさ	秋二五オ 7
		かたじけなく (連用法)	秋二五ウ 1
		かたじけなさ	秋三一ウ 1
		かたじけなさも	秋三一ウ 11
		かたじけなき (連体法)	秋三二ウ 7
		かたじけなく (連用法)	秋三三ウ 4
		かたじけなき物から	秋三三オ 6
ず (サ変)		うちごらんじて	秋一五オ 6
		ごらんじて	秋一六オ 3
		御覧じつれば	秋二九ウ 6
		御らんじつけたるにやと	秋三七オ 10
		御らんじも	秋五一ウ 10
		御らんじて	秋五三ウ 5
		御覧じて	秋五五オ 1
		御らんじて	秋五九オ 7
		ねうじて	秋六一ウ 1
		御らんじて	秋六六オ 7
ねこじ		ねこじて	秋三五オ 3
はじむ		うちはじめ (中止法)	秋二一ウ 6
まじる		まじらまほしくも	秋三〇ウ 7
		ありまじらいて	秋六四オ 9
じに (連濁)		そらじにを	秋一ウ 11
		そらじになど	秋二ウ 4
		そらじに	秋三ウ 2
/漢語	じ (寺)	ちやうらくじへぞ	秋一二オ 10
		ちやうらくじの	秋一七ウ 10

	じ (侍)	ちやうらくじ殿へ ちやうらくじへぞ ちやうらくじへなめりとて ちやうらくじに ちやうらくじへ ちやうらくじへ ちやうらくじのうへの ちやうらくじに ちやうらくじへ ちやうらくじへ じう じうに じうは じうなどが じうは じうも じうさゑ じう じうなども じうが じうにだにも じうばかりを じうは じうも じうなどが じう殿に じうは じうは じうは じうは じうは じうと じう殿に じう がやくのうじゆちめうほくゑきやうと	秋二〇オ 4 秋二二ウ 6 秋三〇オ 1 秋三四オ 6 秋四四ウ 6 秋四九オ 7 秋五二オ 4 秋五六ウ 2 秋五七ウ 6 秋六四ウ 8 秋八ウ 4 秋一〇ウ 8 秋一六ウ 7 秋二二オ 2 秋二二オ 5 秋二五オ 4 秋二六ウ 1 秋二七オ 2 秋三一オ 5 秋三二ウ 1 秋三六ウ 4 秋四一オ 11 秋四九ウ 2 秋四五オ 2 秋四三オ 6 秋四三オ 8 秋四七オ 4 秋四六ウ 4 秋五五オ 6 秋五六ウ 11 秋五六ウ 9 秋五七オ 7 秋六三オ 5 秋四五ウ 4
附属語	じゅ (受)	おとらじものをと きかせじと あらじと いなびゑ給はじ物をとて かない侍まじ をはせじ みせじとも あらじと かくれはて給はじ おはしまさじ やどさじ しらせ給はじかし へだてたてまつらじと おぼしはなれじと おぼさじ かくれはて給はじ をとらじものをなど いかじと あらじと	秋三ウ 10 秋四ウ 11 秋七オ 7 秋八ウ 2 秋九オ 10 秋一三オ 10 秋一三ウ 5 秋一四オ 3 秋一四ウ 5 秋一五オ 3 秋一六ウ 11 * 秋一七オ 4 秋一九オ 5 秋一九オ 7 秋一九オ 11 秋二〇ウ 1 秋二一ウ 3 秋二二ウ 6 秋二五オ 6

まじ	しられじとも	秋二六ウ 5
	あらじと	秋二九オ 3
	はなれじと	秋三五ウ 2
	みしられじと	秋三六ウ 1
	あはじ	秋三七オ 3 *
	あはじと	秋四〇オ 8 *
	あらじと	秋四一オ 3
	しらじと	秋四一ウ 4
	おもはじとは	秋四七ウ 1
	おぼしいでじ	秋四七ウ 6
	あらじ	秋四八オ 1
	しられじと	秋五八ウ 4
	おぼしめさじ	秋六〇ウ 10
	おぼしすてじと	秋六一オ 9
	あらじと	秋六四オ 1
	をろかにを〔は〕しまさじ	秋六五オ 1
	おもふまじきに	秋四ウ 11
	たがへたてまつり侍まじ	秋六ウ 5
	かなうまじき	秋一〇ウ 2
	かなうまじき	秋一九ウ 6
	かなうまじき物を	秋二一ウ 1
	かはるまじげなる（連体法）	秋二一ウ 4
	仰候まじき也とて	秋二三オ 3
	あるまじきぞかしと	秋二八オ 3
	しるまじき	秋三二オ 10
	おもふまじき物を	秋三六ウ 2
	みるまじきそかしと	秋四六オ 8
	おぼしすつまじかりし物をと	秋五二ウ 7
	あるまじけれとて	秋六〇オ 2
	そい給まじと	秋六一オ 5

2.2.2 ぢ（13例）

語種	語	用例	所在
自立語/和語	あぢきなし	あぢきなく（連用法）	秋三〇ウ 10
	うち	あぢきなくて	秋四一オ 8
		うちと	秋二オ 5
		うちのをばも	秋三二ウ 5
		うちと	秋六〇オ 3
	すぢ	すぢにて	秋四オ 11
		すぢをば	秋二九オ 5
		すぢは	秋四九オ 11
	ぢ	山ぢも	秋三八オ 5 *
	はぢがまし	はぢがましく（連用法）	秋五一ウ 7
/漢語	ぢん（陣）	ふぢつぼの	秋四六オ 6
		ふぢも	秋四六オ 7
		ぢんより	秋六三ウ 5

2.2.3 ず (111 例)

語種	語	用例	所在
自立語/和語	かず かならず くちずさみ こずゑ ず (サ変)	かずならぬ かならず かならず くちずさみにも こずゑも せんずる ごらんずるにも 御らんずるに 御らんぜず 御らんずるに おぼしねんず 御覧ずるにも ろんずれば 御らんずるも たゝずみて たゝずみあひて	秋五一オ 7 秋四四ウ 7 秋四九オ 8 秋二四オ 5 秋五八ウ 8 秋四ウ 10 秋一〇ウ 9 秋一六オ 11 秋一六ウ 7 秋二六オ 2 秋三〇ウ 4 秋三二オ 2 秋四五ウ 8 秋五六オ 9 秋一六ウ 4 秋三九ウ 2
	たたずむ		
/漢語	ず (誦) ずず (数珠)	ずきやうなど ずゝを	秋三七オ 7 秋二八オ 2
附属語	ず (助動)	なべてならず (連用法) 人しれず せさせ給はず おぼえず しらず おぼえず おぼえ給はず おぼしめすべきならずなど あらず いらず ひとかたならず あさからず よらず あらず せず あからさまならず うらむべきならず かはらず おはしまさずと おぼえず おぼえずや しらずと まことしからず おぼえずと ゆるしきこゑさせ給はず おもひかけず なのめならず 事ならずと ゆるしきこゑさせ給はず おほせられず 人しれず しらず	秋一オ 8 秋二ウ 9 秋四ウ 9 秋五オ 3 秋五ウ 5 秋六ウ 10 秋七オ 2 秋八オ 9 秋八ウ 6 秋八ウ 10 秋八ウ 10 秋九ウ 2 秋一一ウ 2 秋一二オ 4 秋一二ウ 4 秋一三オ 7 秋一三ウ 8 秋一四オ 6 秋一四ウ 9 秋一五オ 1 秋一六ウ 2 秋一八ウ 6 秋一八ウ 7 秋一八ウ 11 秋一九ウ 11 秋一九オ 2 秋一九オ 4 秋一九オ 9 秋二〇オ 1 秋二一オ 7 秋二一オ 8 秋二一ウ 5

なべてならず（連用法）
 申さず
 せずと
 みへ給はず
 おぼしうとませ給はず
 心ならず
 きゝ給てんずらん
 をはしまさずとも
 すまいえ給はず
 せられず
 こと%＼しからず
 なべてならず（終止法）
 やらず
 なべてならず（連用法）
 たゞならずさへ
 まいり給はず
 みへず
 候はず
 きゝまいらせ候はず
 心ならず
 をはせず
 の給はず
 きゝ給はずや
 思ひ侍らずなど
 思ひ侍らず
 まいらず
 たゝれず
 おぼえ給はず
 せられず
 おぼえ給はず
 うしろめたなからず
 をろかならず
 おほせられず
 おぼえず
 おぼえ侍らず
 けしからずさに
 たのもしからず
 はべらず
 うけ給はらずと
 人しれず
 おはしまさず
 はなたせ給はず
 ゆるさせ給はずと
 おぼさずとも
 おぼしなげくべからずと
 せず
 あらず
 おぼえずとて
 わすれず
 あらずとて
 しられんずるぞ
 みぐるしからんずるに
 心ゆき給はんずるなど

秋二二オ 3
 秋二二オ 11
 秋二三オ 9
 秋二四オ 8
 秋二五オ 9
 秋二六ウ 9
 秋二七オ 2
 秋二七オ 8
 秋二九ウ 1
 秋三〇ウ 10
 秋三一オ 10
 秋三一ウ 2
 秋三二ウ 5
 秋三二ウ 9
 秋三二ウ 11
 秋三四オ 5
 秋三四オ 9
 秋三四ウ 6
 秋三四ウ 7
 秋三六オ 11
 秋三六ウ 7
 秋三八オ 2
 秋四一オ 11
 秋四二オ 2
 秋四四ウ 2
 秋四五オ 2
 秋四六ウ 4
 秋四七ウ 11
 秋四八オ 5
 秋四八ウ 4
 秋四九オ 11
 秋四九ウ 10
 秋四九ウ 7
 秋五〇オ 1
 秋五二オ 1
 秋五二ウ 5
 秋五三ウ 1
 秋五四オ 4
 秋五五オ 8
 秋五七オ 2
 秋五八オ 2
 秋六〇ウ 4
 秋六〇ウ 6
 秋六〇ウ 8
 秋六三オ 3
 秋六三オ 6
 秋六三ウ 5
 秋六五オ 10
 秋六五ウ 8
 秋六六オ 4
 秋七オ 9
 秋七ウ 9
 秋二二ウ 8

	やみはてさせ給なんずと	秋二二ウ 11
	やみはてさせ給なんずと	秋二三オ 1
	かへらせをはしましなんずらん	秋四七オ 3
	いはれ給はんずらめ	秋五一オ 6
	をいゝでんずらんと	秋五五ウ 7
	あらんずらむと	秋六〇ウ 1
	成侍なんずるこそ	秋六二オ 3

2.2.4 づ (107 例)

語種	語	用例	所在
自立語/和語	あづく いづ (出)	あづけたてまつりたれば	秋六二オ 8
		をきいづべき	秋四ウ 9
		おぼしいづるに	秋一三ウ 6
		おぼしいづらんと	秋一七ウ 3
		おぼしいづるにも	秋三〇ウ 6
		さしいづべしとも	秋四七ウ 11
		をいゝづる (連体法)	秋五四ウ 10
		あくがれいづる (連体法)	秋六二ウ 6 *
		いづべき	秋六三ウ 2
	いづ (何)	いづくへか	秋二オ 4
		いづくへも	秋五ウ 6
		いづくにてと	秋六四ウ 8
		いづくに	秋一〇オ 9
		いづくへか	秋一一ウ 11
		いづくへ	秋一二オ 9
		いづくゑか	秋一三オ 3
		いづくへならん	秋一三オ 10
		いづくゑとか	秋一九オ 10
		いづくと	秋一九ウ 2
		いづくへ	秋二四ウ 2
		いづくに	秋二七ウ 4
		いづちへもや	秋二八オ 5
		いづくの	秋三〇ウ 1
		いづくに	秋三四ウ 7
		いづちと	秋三五オ 9 *
		いづくに	秋三五ウ 10
		いづくの	秋三九オ 6
		いづかたゑ	秋三九ウ 3
		いづらと	秋四三ウ 6
		いづくへも	秋五六オ 9
		いづくに	秋五七オ 3
		いづくへ	秋六四ウ 11
	おとづる	おとづれや	秋五五オ 6
		をとづれ (連用法)	秋五五オ 11
	おのづから	をのづから	秋六オ 5
		をのづからも	秋二〇オ 5
		をのづから	秋三〇オ 4
		をのづから	秋六一ウ 9
	かづく	ひきかづき給て	秋八オ 11
		ひきかづきて	秋八ウ 7

	ひきかづきて	秋一六ウ 6
	ひきかづきて	秋二一オ 8
	ひきかづきて	秋五八オ 10
	ひきかづきて	秋五九オ 7
しづ	しづ心なくて	秋一一ウ 4
しづむ	しづみふし給へれば	秋一六ウ 7
	なきしづみたる	秋二一オ 9
	しづみふして	秋二五オ 8
	なきしづみたる	秋二六オ 3
	しづめる	秋五〇オ 8
たづ	あしたづの	秋六一ウ 3 *
たづぬ	たづねあひて	秋一四オ 1
	たづね侍らんとて	秋一八オ 7
	たづねさせ給と	秋一八オ 11
	たづねさせ給と	秋一八ウ 1
	たづねさせ給はんとて	秋一八ウ 4
	たづねまからざらんと	秋一九ウ 3
	たづねさせ給らんと	秋三二ウ 4
	たづねきこゑ給へば	秋五六オ 1
	たづねて	秋五六ウ 10
	たづねゆきて	秋五七オ 7
てづから	御てづから	秋七ウ 8
	御てづから	秋八ウ 1
	御てづから	秋一〇オ 11
	御てづから	秋六〇ウ 2
はづかし	はづかしく (中止法)	秋四オ 7
	はづかしく (中止法)	秋五ウ 4
	はづかし	秋五ウ 8
	はづかしげに (連用法)	秋六オ 10
	はづかし	秋一七ウ 4
	はづかし	秋二九ウ 2
	はづかしと	秋三六ウ 1
	はづかしく (連用法)	秋四四オ 10
	はづかしくも	秋四六ウ 7
	はづかしく (連用法)	秋四九オ 10
	はづかしさ	秋五〇オ 2
	はづかしげに (連用法)	秋五二ウ 2
	はづかしく (連用法)	秋五四オ 8
	物はづかしげに	秋五四オ 11
	はづかしげに (連用法)	秋五四ウ 9
まづ	まづ	秋一二ウ 5
	まづ	秋一三ウ 11
	まづ	秋一六オ 1
	まづ	秋一七ウ 5
	まづ	秋二二ウ 6
	まづ	秋二三ウ 6
	まづ	秋三〇ウ 6
	まづ	秋三六オ 1
みづ	みかはみづ	秋一六ウ 11 *
	きよみづに	秋五九ウ 2
みづから	身づから	秋一八ウ 8
	身づから	秋一九ウ 10
めづらし	めづらしげに (連用法)	秋一七オ 9

	めづらしく (中止法)	秋三三ウ 7
	めづらしく (中止法)	秋五〇ウ 3
よろづ	よろづの	秋五五ウ 1
	よろづは	秋六七オ 2
わづらはし	わづらはしさに	秋二五ウ 10
わづらふ	おぼしわづらはせ給	秋一一オ 7
つかふ (連濁)	みやづかへも	秋六五オ 9
つく (連濁)	やまうづきて	秋二オ 1
	けしきづきて	秋四六オ 7
	心づくまでも	秋五三ウ 2
	事づけて	秋五八オ 6
	あいぎやうづき給へりし	秋六六ウ 7
つま (連濁)	しのびづまに	秋六一オ 3
つよし (連濁)	心づよき (連体法)	秋四オ 4

2.2.5 づ→ず (1 例)

語種	語	用例	所在
自立語/和語	ひとつて	人ずてならで	秋五七オ 10

2.2.6 誤入力

以下の例も、「づ」を「ず」に誤るものかと思われたが、本文にあたりなおすと、いずれも「づ」であり、訂正した。

- いづくへも 秋五ウ 6
- はずかしく (中止法) 秋五ウ 4
- はずかし 秋五ウ 8

3 考察

3.1 鎌倉時代以前の四つ仮名表記についての先行研究

3.1.1 仮名文書

鎌倉時代の混乱表記の例としては、森田 [1942] が指摘した日蓮遺文の例を嚆矢として、古文書 (仮名文書) の例がおおく挙げられているが、たとえば、森田 [1942] が「真蹟中の唯一の例」「全集本の誤植とも考へられず、信じてよい例」とした、

- 大将どのの御かんきをかほりてかまくらゆひのはまづちのろうにこめられて
十二年めしはじ (恥) しめられしとき

の例は、辛島 [1986(2003)] によれば、原本写真では、「めしはじめられしとき」とあるほか、その多くが、「活字テキストによる誤植の引用の例」、「文書の内容と用例の意味」の検討が不十分で間違った語の引き当てをしているもの、「後世における文書の転写本の用例」であって、たしかに鎌倉時代のものとして確認できる四つ仮名の混乱表記の例は4例にとどまるという（ぢ→じ2、じ→ぢ1、づ→ず1）。

○ この十日のよ、せうまうにあふて候。この御はう、よく／＼たずね候て候なり。（親鸞書状）

辛島 [1986(2003)] は、「仮名文書における開合と四つ仮名の混乱例は、その〈実用的対話性〉によってもたらされたものである」とする。

3.1.2 仮名文学

遠藤 [2006] では、院政期書写の西本願寺本三十六人集の仮名表記が検討され、四つ仮名については、2例の違例が存することが指摘されている（ぢ→じ1、づ→ず1）。

○ くもゐよりうすまきおつるたきつせの／ゆきとみえつゝちよをこそふれ

また、定家筆（定家監督書写本とも）徳川美術館本基俊集に、「てつさひ」（手遊）の違例のあることも指摘している。

3.1.3 訓点資料・片仮名文・古辞書

- 高山寺蔵法華經遊意角筆点（院政期）に「動」字に「ヤ、ムツレハ」
- 中山法華經寺三教指帰注に「ナマス」（鯨）
- 前田本色葉字類抄に「嬢」（ヂョウ）字の音注として「上」（ジョウ）字

などの例が、鎌倉 [1996] に整理されている。

3.1.4 まとめ

はやく常陸風土記に久慈郡（クジ）の語原を鯨鯢（クヂラ）にもとめることが行われ、月詣和歌集に出雲路（いづもぢ）と五文字（いつもじ）の仮名違いの掛詞がゆるされるなど、四つ仮名はその合流以前にも音の近似したものとされていたようであり、上に見てきたように、鎌倉時代以前であっても各種資料にわたって四つ仮名の混乱表記の例は存在しており、かならずしも「人ずて」1例のみをもって書写年代を下らせてみるには及ばないようにも思われる。

3.2 異分析の可能性

また、別の可能性としては、秋香台文庫本の書写者がこの箇所を文字列を「人伝て」とは別語に解釈していたことも考えられなくはない。たとえば、

- 人捨てならで
- 人已でならで

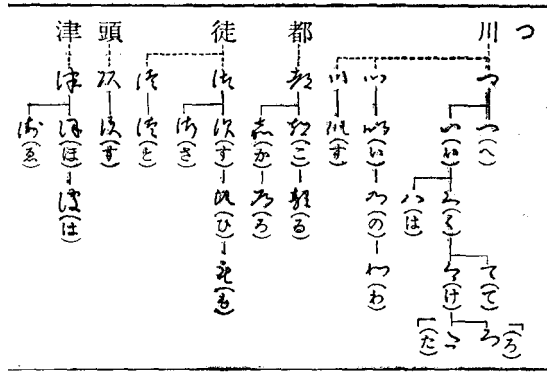
などである。ただし、上は仮に考えられる語をあげてはみたものの、それで意味がおおる文として解せるようにも思われない。「むかしはうへの御もてなしに、いとけぢかく人づてならで、ものをもきこえたまひしを」(源氏物語、紅葉賀)、「いまはたゞ思ひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな」(藤原道雅、後拾遺集恋三、750)のように安定した語法を、強いて異分析したものとも考えがたい。

3.3 文脈理解に基づかない書写の可能性

しかし、そもそも書写者が本文の意味を理解したうえで写しているともかぎらないのではないか。たとえば、池田 [1941] の「第十五章 日本古典作品に於ける本文転化の諸類型とその実例」「第二節 無意識になされたる転化」「一 符号・文字・単語の錯誤」「a 類似せる形態による混同」「1 平仮名相互の混同」「イ 単字より単字へ」の「つ」の項では、以下のような「つ」字を起点とする誤写の例をあげている。

(二) あきもすきぬと	あきもつきぬと	和漢朗詠集	本帝他 室傳 御定 物類 傳筆 行山 成城 筆切 粘その 葉	つつはつ川双ははつはつ は乃はてとれはははははは ハノハトテミタスミスミサコケイミイミ はははははははははははははははは はははははははははははははははは ハハハハハハハハハハハハハハハハ
-------------	---------	-------	---	---

より簡明に整理したものとして、亀井/山田 [1966] 所収の「字形転移・誤読の系路」もあげておく。



むぐらの祖本から秋香台文庫本にいたるまでの伝写の間に、たとえばもともと〈徒〉字で記されていたものが、〈須〉字に誤られ、それがさらに〈春〉字で写されるようなことは、けしてありえないことではないように思われる。索引中にも次のような注記をしばしば施したように、かならずしも意味の十全にとおる本文であるとはいえないようであるのは、秋香台文庫本が文脈理解に基づかない書写によるものであるためかもしれない。

- うれしうも 秋三ウ2《鎌倉時代物語集成「たれしら」と翻字》
- こひ給へども 秋三四オ2《中世王朝物語全集では「呼び」と翻字》
- こんを仏道と 秋六三オ4《「今仏得最上」の誤か》
- をやたがり 秋三一ウ9《不詳語。鎌倉時代物語集成「を」に「ねカ」、中世王朝物語全集「親たち」》

4 おわりに

鎌倉以降の物語の書写活動についての知るところがすくなく、多分にたしからしさを欠いた推測を重ねるのにちかいものになった。また、四つ仮名以外にも、しばしばともに調査されるところの開合のほか、語彙、表現、文法などの語史的指標についての調査の必要があるだろう。

参考文献

- [1] 池田亀鑑 [1941] 『古典の批判的処置に関する研究：第二部 国文学に於ける文献批判の方法論』（岩波書店）
- [2] 遠藤邦基 [2006] 「西本願寺本三十六人集の仮名表記の異例：「四つ仮名」「開合」などを中心に」『国語文字史の研究 九』（和泉書院） pp.1-28.

- [3] 鎌倉暄子 [1996] 「「四つ仮名」について：国語史的観点から」『文芸と思想』60（福岡女子大学） pp.1-12
- [4] 亀井孝/山田俊雄 [1966] 『言語史研究入門』（日本語の歴史 別巻、平凡社）
- [5] 辛島美絵 [1986(2003)] 「国語資料としての仮名文書：鎌倉時代のオ段長音の開合と四つ仮名の混乱表記を通して」『国語学』146（『仮名文書の国語学的研究』清文堂出版に所収）
- [6] 森田武 [1942] 「日蓮聖人遺文の仮名遣：その注意すべき二つの事象について」『国文学攷』9、pp.52-77.

表 1: 2 写本・全集本対照表

秋本	全集（頁-行）	書本	秋本	全集（頁-行）	書本	秋本	全集（頁-行）	書本
1 オ	146- 1		30 オ	173- 9		59 オ	199- 7 198-17	14 オ
ウ	146-10		ウ	173-17		ウ	199-15 199- 6	ウ
2 オ	147- 3		31 オ	174- 8		60 オ	200- 5 199-14	15 オ
ウ	147-12		ウ	174-17		ウ	200-12 200- 3	ウ
3 オ	148- 1		32 オ	175- 6		61 オ	201- 1 200-10	16 オ
ウ	148-10		ウ	175-13		ウ	201- 7 200-17	ウ
4 オ	148-17		33 オ	176- 4		62 オ	201-17 201- 5	17 オ
ウ	149- 7		ウ	176-12		ウ	202- 6 201-13	ウ
5 オ	149-15		34 オ	177- 3		63 オ	202-14 202- 2	18 オ
ウ	150- 8		ウ	177-11		ウ	203- 5 202- 8	ウ
6 オ	150-16		35 オ	178- 2		64 オ	203-14 202-16	19 オ
ウ	151- 6		ウ	178- 9		ウ	204- 4 203- 7	ウ
7 オ	151-13		36 オ	179- 1			203-14 204- 4	20 オ
ウ	152- 4		ウ	179- 9			204-12 205- 2	ウ
8 オ	152-12		37 オ	179-18			205-10 205-18	21 オ
ウ	153- 2		ウ	180- 8			206- 7 206-13	ウ
9 オ	153-11		38 オ	180-16			207- 1 207- 8	22 オ
9 ウ	154- 3		ウ	181- 6			207-16 208- 4	ウ
10 オ	154-10		39 オ	181-15			208-12 209- 1	23 オ
ウ	155- 1		ウ	182- 4			209- 8 209-16	ウ
11 オ	155-10		40 オ	182-12			210- 4 210-11	24 オ
ウ	156- 1		ウ	183- 4			210-17 211- 7	ウ
12 オ	156- 9		41 オ	183-12			211-14 212- 2	30 オ
ウ	157- 1		ウ	184- 2			212- 9 212-16	ウ
13 オ	157- 9		42 オ	184- 9			213- 5 213-12	31 オ
ウ	157-18		ウ	184-18			214- 2 214-10	ウ
14 オ	158- 9		43 オ	185- 7			214-18 215- 6	32 オ
ウ	158-16		ウ	185-16			215-14 216- 2	ウ
15 オ	159- 6		44 オ	186- 5			216- 9 216-15	33 オ
ウ	159-16		ウ	186-12			217- 5 217-12	ウ
16 オ	160- 8		45 オ	187- 1			218- 1 218- 8	34 オ
ウ	160-17		ウ	187- 8			218-15 219- 4	ウ
17 オ	161- 6		46 オ	187-15 187-15	1 オ	65 オ	216-10 216- 9	35 オ
ウ	161-15		ウ	188- 4 188- 4	ウ	ウ	216-17 216-15	ウ
18 オ	162- 6		47 オ	188-12 188-12	2 オ	ウ	217- 8 217-12	36 オ
ウ	162-15		ウ	189- 1 189- 3	ウ		217-16 218- 1	ウ
19 オ	163- 6		48 オ	189-10 189-11	3 オ		218- 8 218-15	37 オ
ウ	163-14		ウ	189-17 189-18	ウ		219- 4 219-10	ウ
20 オ	164- 3		49 オ	190- 7 190- 7	4 オ		219-17	40 オ
ウ	164-12		ウ	190-15 190-16	ウ			ウ
21 オ	165- 3		50 オ	191- 6 191- 6	5 オ			
ウ	165-11		ウ	191-16 191-15	ウ			
22 オ	166- 2		51 オ	192- 6 192- 5	6 オ			
ウ	166-11		ウ	192-14 192-13	ウ			
23 オ	167- 2		52 オ	193- 4 193- 2	7 オ	65 オ	216-10 216- 9	36 オ
ウ	167- 9		ウ	193-11 193- 9	ウ	ウ	216-17 216-15	ウ
24 オ	168- 3		53 オ	194- 1 193-16	8 オ	66 オ	217- 8 217-12	37 オ
ウ	168-11		ウ	194- 9 194- 7	ウ	ウ	217-16 218- 1	ウ
25 オ	169- 1		54 オ	194-17 194-14	9 オ		218- 8 218-15	38 オ
ウ	169- 9		ウ	195- 7 195- 3	ウ		219- 4 219-10	ウ
26 オ	169-17		55 オ	195-16 195-11	10 オ		219-17	40 オ
ウ	170- 7		ウ	196- 5 196- 1	ウ			ウ
27 オ	170-14		56 オ	196-13 196- 7	11 オ			
ウ	171- 5		ウ	197- 3 196-14	ウ			
28 オ	171-12		57 オ	197-12 197- 5	12 オ			
ウ	172- 3		ウ	198- 1 197-12	ウ			
29 オ	172-11		58 オ	198-11 198- 1	13 オ	67 オ	-	
ウ	172-18		ウ	198-18 198- 9	ウ			